

## 令和2年度第1回神奈川県総合教育会議議事録

名 称：令和2年度第1回神奈川県総合教育会議  
開 催 日 時：令和2年11月17日（火曜日）午前9時00分から10時00分まで  
開 催 場 所：県庁新庁舎5階第5会議室  
出 席 者：黒岩祐治知事、桐谷次郎教育委員会教育長、下城一教育委員会委員、  
河野真理子教育委員会委員、吉田勝明教育委員会委員、  
笠原陽子教育委員会委員、佐藤麻子教育委員会委員  
次回開催予定日：令和3年度中を予定（時期未定）  
問 合 せ 先：政策局政策部総合政策課政策調整グループ宇佐美、弟子丸  
電話番号(045)210-3056（直通）  
ファックス番号(045)210-8819

---

### 1 開会

佐藤政策部長：開会にあたりまして、会議を主催いたします黒岩知事より、あいさつを申し上げます。

黒岩知事：令和2年度第1回神奈川県総合教育会議を始めさせていただきます。大変お忙しい中お集まりいただき誠にありがとうございます。はじめにこの教育委員会委員におきまして、これまで多大なるご尽力を賜りました、高橋委員の任期満了に伴いまして、この度、下城一委員を新たにお迎えいたしました。どうぞよろしく願いいたします。

本日の総合教育会議はこの新しい体制での初めての会議となります。委員の皆様にはこれまで同様、この場を通じて、十分に意思疎通を図りまして、本県の教育行政を推進して参りたいと考えておりますので、改めてよろしく願いしたいと思っております。

本日は、コロナ禍における県立学校の学習活動のあり方と児童・生徒の心のケアについて、皆様と議論したいと考えております。新型コロナウイルス感染症については、一斉臨時休業を行うなど、学校生活において、非常に大きな影響が生じました。今後も新型コロナウイルス感染症への対応の長期化が見込まれるため、感染対策を継続的に行っていく、新しい生活様式を踏まえた学習活動や児童・生徒の心のケアに取り組んでいくことは重要と考えております。これらのことにつきまして、委員の皆様から忌憚のないご意見をお聞かせいただきたいと思っておりますが、議論に先立ちまして、新型コロナウイルス感染症の影響による県立学校の現状について、県立湘南高等学校の稲垣校長から、現状報告をしていただきたいと思います。学校現場の現状を共有した上で議論を深めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

### 2 現状報告

#### 現状報告 新型コロナウイルス感染症の影響による県立学校の現状

佐藤政策部長：それでは、現状報告に入ります。本日は県立湘南高等学校の稲垣校長にお越しをいただいております。新型コロナウイルス感染症の影響による県立学校の現状につきまして、ご報告をいただきます。

- 県立湘南高等学校 稲垣校長から資料に基づき現状報告。

### 3 議事

#### コロナ禍における県立学校の学習活動のあり方と児童・生徒の心のケアについて

佐藤政策部長：それでは、ここからの議事進行は知事をお願いいたします。よろしくお願ひします。

黒岩知事：稲垣校長どうもありがとうございました。教育現場において、どれだけ生徒の皆さんにプレッシャーがかかっているのかといったことの生々しい現状が浮かび上がって参りました。本当にありがとうございました。これを踏まえながら、コロナ禍における県立学校の学習活動のあり方と児童・生徒の心のケアについて、議論を深めていきたいと思ひます。

笠原委員：全般的な話になってしまいますが、学習指導要領に書かれていた予測困難な時代が本当に現実になったという実感を持っています。併せて、この感染症によって、学校生活に本当に大きな変化がもたらされました。その中でも全国一斉の休業ということは、これまでの学校の常識を大きく変えるものだと思ひています。つまり、学校はそこにある、先生方はそこにいる、教えるべき教材、教科書はそこにある、でも肝心の子どもたちがいない、子どもたちは来たいけど来られない。その状況が改めて今まで私たちが学校というものを、どのように捉えてきたのかを考え直すいい機会になったと思ひています。

つい先だって、大学の講義でも、実務家の先生方が1年間学びに来ていましたので、改めて先生方にとって学校とはどんな役割なのか、子どもたちにとって教師の役割とはどういったものなのかを話し合いました。「令和の日本型学校教育」の中で学校の役割が三つ示されました。学習の機会と学力の保障ということ、全人的な教育を進めていくこと、それから身体的・精神的な保障をしていく。先生方にとって、学校、そして教師はどのような役割なのかというと、学校は子どもたちにとって、知的好奇心を満たす場であり、社会的な自立、つまり子どもたちが学校の中でお互いの関係性を持ちながら、社会人になっていくためのプロセスを経ていく重要な場であることを確認しました。これからはそういうことを考えて、学校教育に当たっていかなければいけないことを改めて確認した、という声がありました。

そういう中で、少人数指導の重要性であるとか、ICT教育であるとか、それから、神奈川県がこれまでずっと言ってきた子どもの心のいのちと身体のいのちを守るという教育と福祉の連携について、クローズアップというか表舞台に出てきて、加速度的にこういうものに対して対応していかなければいけないという議論が巻き起こっています。学校現場では、そういう議論はもちろん聞こえてくるけど、目の前にあることに対して、正解なのか、不正解なのかを考える間もなく、とにかくやっていくしかないという中で、先ほどの稲垣校長の話にもありましたが、高校では生徒が中心になって変えていった。小学校や中学校では、一人ひとりの先生方、若手も含めてですが、先生方が一旦立ち止まって、自分たちの教育活動を見直しながら、本当にこれでいいのかということを、選択して判断をしていくという機会が訪れました。校長からすると、学校組織としては管理職だけが動いているのではなくて、先生一人ひとりがこの問題にしっかりと向き合っているところが、非常に心強かったというお話も伺いました。

同時に、先ほど申し上げた一斉休業になったということは、今まで不登校のお子さんたちは、一部のお子さんだけであり、担任する先生が向き合ってきました。今回、すべての子どもたちが登校したくても登校できない状況になったということで、学校教育で本当に何を大事にしていかなければいけないかを非常に強く感じたという声を、いくつか学校を訪問させていただく中で伺い、これからの学校を考えていく機会になりました。稲垣校長がおっしゃっていたいくつかの課題は、もちろん優先的に対応していかなければいけないことだと思ひますが、やはりできないということではなく、やれることをとにかくやっていくという状況に学校が大き

く舵を切ってきているという実感を持っています。

河野委員：まず、このコロナ禍で学習活動や、児童・生徒について考え、そして話す機会をいただきありがとうございます。湘南高校の稲垣校長、本当にありがとうございました。

私も笠原委員と少し似ているところがありますが、今年、学校関係者だけではなく国民全体が新しい学びのあり方とか、それから学校のあり方というものを考える歴史的な年だったと考えます。それほど注目が集まっていることを考えながら、努力していかなければいけないことも多いと思います。先ほど稲垣校長から、最後に課題のご提示がありましたので、それを拝見しながら私からは二つの観点から思うところを話させていただきたいと思います。

一つは、この課題でお示しいただいているICTの観点です。稲垣校長が話されたので重なるところは割愛させていただきますが、ICTはコロナ禍だけではなくて、これからのインフルエンザ、そして神奈川県だと地震、津波、台風、豪雨ですとか、様々な災害等があったときの万が一でも学びを止めないという工夫の中では、とても大切な課題であり、オンライン対応ができるという環境の整備が重要だと思います。民間企業では、日頃からテレワークの整備をやっていたところは、業務の推進にはあまり支障なく、影響を最小限にとどめて進めることができたと聞いています。やはり万が一のときの備えとして、すごく重要なリスクマネジメントというよりも、これからはインフラ的な要素としてICT環境というのは重要だと思います。

先ほど稲垣校長から良い面のお話もありました。自分自身がコンサルタントであって講義をする者なので、3月、4月ぐらいは否応なしにやらなければならない状況でしたが、ICTのオンラインはうまく使えば素晴らしいので、その使い方をみんなで習うということも重要です。本当に良かったと思ったことは、体調が悪くても誰でも参加できること。また、マスクをしないでもよいのでみんなの顔が見えるとか、そういう小さなメリットもたくさんあります。全国、世界のいろいろなところともリアルタイムでつながれるというワクワク感もありますので、そういう良い点も踏まえて、これからは環境の整備が重要だと思います。先ほどハイブリッドという話がありましたが、これはすごく難しいのですが、対面とオンラインの両方を上手く行う神奈川らしいモデルができてきたらよいと思いました。

今、気になっているのが、高校生にはパソコンやプリンターがまだ整っていないということです。小学校、中学校は来年度から1人1台端末ぐらいになると聞いていますが、高校生は大分遅く、高校生だからこそ必要だと思っています。BYODだとスマホでできますが、自分自身が講義等をしている中で、相手がパソコンだとやはりやり易いこともありますので、今後の環境整備を改めて考えていくことが課題だと思いました。

二つ目として、感染症対策の観点です。一つは、先ほど笠原委員がおっしゃっていた少人数での指導で、これもフィジカルディスタンスを考えると、どうしても設備的な問題ですとか、教職員の人数配置ということもあると思います。同時にその人数を少なくするしないにかかわらず、感染症対策の備品とか消耗品が常に必要になります。これは民間企業も本当に大変ですが、学校はさらに密になりやすいので、今年が緊急だったということではなくて、今後、安心・安全の学習を進めていく上では、スタンダードになっていく必要があると感じました。これから何かあったときにも学習が続けられるように、そして学校に来たときには、安心・安全に授業を受けることができるような環境を整備することが課題ではないかと思っております。

佐藤委員：私は弁護士としてコロナ関係のお話をする機会もありますが、どうしても弁護士の仕事はリスクの指摘ということもありまして、ネガティブな面に自分の気持ちが行きがちです。稲垣校長のお話にもありました経済格差の拡大ですとか、障がい児の教育、養育の困難さ、入試に関する情報の錯綜のほかにも、感染者に対するバッシングですとか、あるいは休業期間中

における子どもたちのスマホ依存や昼夜逆転の問題など、いろいろなネガティブな面がありました。今日は、自分自身ができるだけポジティブな面に注目してお話をしようと考えて参りました。

ポジティブな面というのは、稲垣校長、河野委員のお話にもありましたように、一つはICT教育に対する環境整備が一気に加速したということ。二つ目は、少人数学級に関する議論が進んでいるということ。三つ目は、今回は検討しないということになったと思いますが、秋入学に関して県民・国民の皆さんで議論する機会があったということ。いつか実現できればいいとは思っていますけれども、そのような良い面もあったのではないかと考えております。

そのICT教育の環境整備のことですけれど、学校の先生方は、どういうわけか同じ年代でも企業の方に比べて、ICTに関するアレルギーというのが少し強かったように思います。今回のことで、課題提出や配信等で対面と遜色ない、あるいはもっと効率的にできるという面も体験することができて、そこは大変良かったと思っています。もちろん学齢期あるいは小学校、中学校、高校時代の子どもたちの教育というのは、笠原委員もおっしゃったように知識、技術を身につけるだけではなく、人格の陶冶ということが大変重要でありまして、集団で同じ場に身を置いて切磋琢磨したり、みんなで課題をやり遂げたり、達成感を得たりということが大変重要ですので、ハイブリッドといいますけれども、ICTの面で欧米や韓国に比べて日本は立ち遅れていたと言われていましたが、その面が整備されたという、対面と並ぶ一つのチャネルを確立することができたということが良かった点だと思っています。

そして、ICTに関してもう一点、部活動や課外活動などで生徒自身が企画したり、発信したりすることで、成功された例が報告されています。そのこと自体が新たな学びの場となっていると考えます。ネットとリアルとの両方で学習を含めた様々な体験ができることよいと考えます。修学旅行も文化祭も今年はなかなか難しいという年になりましたけれども、これをきっかけに稲垣校長のご報告にもあったような海外の方との交流、あるいは海外でなくても国内で、普段だったら会うことのない人たちとの交流というのが進めば良いと思います。

感染症拡大という今まで経験したことのないような場面において、大人は国も自治体も先生方も、正解というのは持っていないと思います。課題解決力という意味でデジタルネイティブの子どもたちの方が、むしろ最適解を持っていたのかもしれないかもしれません。ネット、リアルを問わず、子どもたちが自発的、自律的に学びに向かうような働きかけができれば学校として大成功ですし、教育委員会としてはそういった支援をしていきたいと考えています。

少し話が大きくなるかもしれませんが、自分が子どものとき、高校のとき、どういう時代だったかを考えると、昭和40年代、50年代ですけれども、どちらかといえば平和で、高度成長期というか右肩上がりの時代だったと思います。ところが今の子どもたちは、2008年のリーマンショックだったり、2011年の東日本大震災や原発事故だったり、私の育った時代と比べて、昨日と同じ明日が保障されているわけではないという時代を生きているように思います。時代のせいにするのは良くないですが、私自身が前例踏襲であるとか、横並びであるとか、上意下達であるとか、そういうことをしていれば安心だというようなマインドを身につけてしまったところもあるので、これからの子どもたちは、自分たちで困難を切り開いていく、そういったたくましさを身につけていくのではないかと期待しております。

吉田委員：まず、児童・生徒の心のケアということに関して、コロナ禍だから、何とかだからと特別なものはないのです。当たり前のことだと思います。でも、それでは答えになっていないと思いますので、私は心を扱う医師として、そして、たくさんの学校のスクールカウンセラーを担当してきた経験、いろいろな形で対応したものを踏まえて、少しお話をさせていただきたいと思っています。

一言で言えば、不安と偏見の除去をすることが大事なことです。終わりのない得体の知れな

い感染症への不安、恐れに関して、そのためには、正しい教育、適切な理解、そして相談体制をきちんと作っておくということが大事なことだと思います。いろいろ報道等やあるいは教育の内容に関しても、一番気になっているのは、怖いから、危険だから、恐ろしいから、だから予防的にマスクをしろ、手洗いをしろという表現が非常に多い。そうではなくて、もっと安心させてあげて欲しいと思います。適切な予防をすれば、このくらい減ったとか、こういった形で抑えられるといった報道や教育をもっとしていただきたい。何でも怖いから、危険だからやめなさいではなくて、こうやった結果、非常に良くなったということの方が、子どもには響くのではないかという印象を持っています。

不安の除去に関して、大人であれば、かかりつけ医を持って、何でも相談できる体制を作ろうというような形で医師会として働きかけています。子どもの場合、こんなこと聞いていいのか、こんなことを相談していいのかと思ひ、人に言えない思いがずっと内在しています。確かにスクールカウンセラーの充実が必要だと思いますが、スクールカウンセラーだって特別なことができるわけではないです。スクールカウンセラーあるいは臨床心理士等が集まって、どのようなアドバイスや接し方をしたらいいのかレクチャーしますが、アクティブリスニング、積極的に聞きなさいと言って納得させようと思ったら大間違いです。何でも子どもたちの心配事、弱音を聞いてあげるというスタンス、そういった形をどんどん充実させてやっていただきたいと思ひます。

稲垣校長が先ほどおっしゃったように、不登校というのが非常に問題になっており、在宅でリモートがスタートしたときに、うちの子は不登校だったが、リモートのおかげでみんなと一緒に授業が受けられるようになったといったような賛美の意見が出た時期もありましたけど、結果的には、そういったことはなく、やはり長期間休んでいると登校が始まったときに出て来られなかった。そして、不潔恐怖症あるいは潔癖症的なものが始まって、結果的には不登校から抑鬱状態、鬱病になる、これは大人でも同じような形が起っています。だからそこに関しては、正しい適切な理解をしてもらわなければいけないと思ひますし、大人がある意味での模範を示すことが大事なことだと思ひています。大人たちが進んでそういったことを行う。よく食事中もマスクをちゃんとしてというディスカッションがあったかと思ひますが、案外マスク会食はできるのです。ご飯を食べているときにはずして、お酒を飲んで、帰るときにまたマスクをすればいいのではないかということが広がっている中で、外して食べて、また話すときはマスクを付けるというのはやってみると結構できます。そういったことをもう少し実践すべき。最近レストランなどに行ったりすると、わざわざマスク入れまで用意している店があります。マスクを外して、ここにしまっておいてくださいというようなことはせず、マスクを徹底していただきたい。きちんと食事中も、そういった対応をしてくださいというようなことが非常に大事なことだと思ひています。

もう一つは、稲垣校長も触れていた特別支援学校のことです。私は三つ、四つの特別支援学校の学校医を務めています。その中でいろいろな相談を受けますが、よりきめ細かな対応が必要になるのは家庭内感染です。ある学校で高等部3年の子どもが陽性になりました。父親が陽性、母親も陽性、そして子どもも陽性になったケースです。濃厚接触者を探して、結果的にはそれほど濃厚接触者はいなかったけれど、やはりそこでしっかりしたケアをしてやらなければいけない。そのお子さんは知的障がいがあるので、単語がそれほど言えないのです。三つのセンテンスが言えないけれどもコロナとは言える。そのようなことを人に言わなくてもいいのに、本人は言ってしまいます。その辺のところをどう対応していくのか、きめ細かな、本当に偏見をなくすようなことをやっていかなければいけないと改めて感じたところです。

そして稲垣校長からもポジティブに受け取っていかうとおっしゃっていましたが、私もそのとおりだと思います。いろいろなことをプラスに考えていかなければいけないと思ひています。コロナ禍で大変だというよりも、コロナ禍のおかげでどんなことができたのだ、どんなプ

ラスができたのだということをもう少し取り上げて、公表していくことも大事だと思います。私が専門家として使う言葉としては、「異常な出来事における正常な反応」があります。

「あなたが今学校に行けないのは、不潔恐怖症になっているのは、思い悩んで落ち込んでいるのは、それは何にも異常ではないのだよ、あなたは正常なのだよ、コロナ禍自体が異常なのだよ、異常な出来事による正常な反応だからね」ということで、子どもの不安を取り除いてやることが大事なことだと思います。

子どもたちは、必要以上に大人や先生に気を使っています。何かがあつて落ち込んで、つらくて苦しくて、元気かと聞かれると元気ですと答えます。それは、大人たち、先生たちが喜ぶことを知っているからで、そこで症状を隠してしまいます。もちろん本人は隠す意思はないけれども元気というふりをします。そういった状態を躁的防御と表現します。例えば、先生方も徹夜明けは、体は疲れているが、テンションが上がっているということがあります。じっとしていると、そのままバタンと倒れて寝てしまうので、何となく気持ちをハイにして、それを保っている状況があります。躁的防御、自分を躁状態にして防御していますが、それを周りから見ていると元気だから大丈夫、ケアは必要ないと、そう思っていたら大間違いです。必要以上に元気なときは、より気を使って、より悪い状態であると知ってケアしていくことが必要だと思っています。

この間、ある学校の体育祭に学校医として参加する機会がありました。こんな時期だから中止になると思っていたけれど、生徒たちの熱い要望、熱情によって開催されました。どのように開催したかという、応援に来る家族は1家庭1人にしたり、学年によって時間を分けたり、いろいろな工夫をしていました。そして生徒たちが、例えば、玉入れで密になると困るから、サークルを書いて1例に並ぶとか、綱引きは一对一でやるとか、いろいろな工夫での危機管理、あるいはそういったときにどのように対応するか、これも非常に学びになったと思います。

下城委員：まず、今、吉田委員がおっしゃった躁的防御ということについて、私も大学で思い当たります。オンライン等でやっていると、受け答えはしているけれど、次の行動が少しも出てこないで、改めて同じレクチャーをしなければいけない。なのに、わかりましたと言うけれど、次の行動はやはり出てこない。何か大きな不安を感じているのだろうと思います。

4月以降、大学はオンラインでずっと授業をやってきました。その意味ではパイロット的な立場にあるかと思っています。ですが、それゆえにオンライン授業の問題点というの、すでに多々出てきているように思います。今、5割まで対面に戻せと言われてもなかなかできないという現状の中で、大学も考えていかなければいけないだろうと思っています。

4月からの入学生がコロナ時代の新入生、第1期生だったわけですがけれども、おそらく次の4月からの入学生は、また事情が違うと思います。先ほど稲垣校長のお話にありましたように、入試、進路についても、家庭の家計状況などを含めて変えていかないといけない。横浜国立大学でも、どうしても国立に入りたいということで、レベルを下げて受験してくる子が、次の4月から出てくる。そういう子たちは、入学しても不安やこんなはずではなかったということで、素直に喜べないというような状況も出てくるだろうと思っています。

もう一つ、高校にこの間ずっと関わってきた中で、少しお話をさせていただきます。今も話しましたが、各家庭の家計状況で大学進学がままならないという生徒たちが多数出てくるだろうと予想します。その中で県立高校の果たすべき役割、中等教育の完成形として、これまでのような高等教育への進学準備校というようなことではなく、人格の完成も含めた中等教育として、きちんと大人に、社会人に育て上げて、いつでも社会に出せるようなところまでっていくということ、もう一度、各高校の先生たちの意識の上できちんと位置付け直す。今、神奈川県は高校改革もやっています。それぞれの学校が特色を持って、卒業生を送り出せる、単な

る進学準備校に終わらないということを、もう一度改めて再確認しなければいけない時期に入っていると思います。

桐谷教育長：各委員から、いろいろご意見いただいている内容について、それを具体化していくその手立て、その術については、引き続き、行政委員会として知事と調整させていただければと思っております。

一つ、現実的な問題としては、コロナの終息がなかなか見えない中で、子どもたちの安全安心を守りながら、同時に学びの保障をしていく。それを基本線にして、これから高校は、入学者選抜ですとか、卒業あるいは入学という年度の中でも一番難しい、いろいろな事案が出てくる時期を迎えていきます。そこにしっかりと対応していくことが教育委員会の役割だと思っています。

ただ、同時に、コロナのその先を見据えていくことも大切だろうと思っています。今、様々な議論として、ICTあるいは少人数等々が言われておりますが、具体的にコロナの先にある学校教育、高校教育は、どういう絵姿を私たちは希望を持って、見つけ出していくことができるのか、そこを議論していく大切さがあるだろうと思っています。

私が一番気になっているのは、日本の学校教育は、集団の中で社会性を育てていく。文部科学省は学校に対する役割として、全人的という言葉を使います。様々な学びの場はあるけれども、学校がその役割を逃れることは絶対にならないだろうと思います。そうしたときに、いわゆるティーチングの部分はICTでできたとしても、コーチングの部分、子どもたちを育てというのは、やはり、これは人が人を育てていくという根本的なところをしっかりと押さえる必要があるだろうと思います。そのためには、その資源である施設ですとか、人ですとか、あるいは教え方ですとか、そういった根源的な資源を大切にしていく。そのために、引き続き、知事もいろいろなご調整をお願いできればと思っております。

黒岩知事：ありがとうございました。本当に非常にタイムリーで、しかも非常に深い議論ができたと思っております。稲垣校長、問題提起ありがとうございました。

今、議論を聞いていても、やはり冒頭、笠原委員がおっしゃったように、学校とは一体何だったのか、根本的なところに目がいつているという気がします。ただ、その中でネガティブだけではなく、ポジティブな面も見られるということもある。その中で子どもたちに、どのように手を差し伸べるのか、いろいろな具体の課題もある。ウィズコロナ、アフターコロナというところを見据えた形で、これからどうなっていくのか、問い直されているものについて、我々はしっかりと受けとめて、それを活かしていくことが非常に大事だと思います。要するに改革という言葉は、いろいろな形で使われてきましたが、なかなか平時で改革していくことは難しいことがあります。何かとんでもないことが起きたときには改革というのは、一気に進んでいくということが実はあるのではないのか、今、そのようなことが目の前で起きているのではないかという気がします。

ネットでもまさかこれだけ授業ができるとは、誰も思っていなかったのではないのでしょうか。でも、やらざるを得ないとなったら、できてしまうと言ったときに、その授業がネットできるときに、これから先、今までの常識を全部忘れて考えれば、一番上手な先生が教える授業を、みんなで受ければそれでいいのではないかと、学校単位に一人一人の先生がいて、一人一人やる必要がどこにあるのか、教えるということだけからすれば、そのようなことになってくるのではないかと。でも、学校はいらないのではないかと。そういったことはなく、やはり学校はあるだろうといった中で、先ほど、桐谷教育長に締めくくっていただきましたが、そのコーチングといったものを、全人格的に育てていくという、自分の学校生活を振り返ったときに、授業そのものの記憶というよりも、みんなと過ごしたその時間とか、先生からの

様々な体験みたいなのが、自分の体の中に、芯となって残っている。それがやはり教育の本質的なところで、だから、その先生自体が、教えることに対して、どういう姿勢で取り組んでいるのかとか、問題のある子どもたちに、どう向き合っていたのかとか、様々なそういったことが、自分たちの教え、学びに繋がっていたということを振り返るわけでありまして、そして、やはりこれからの時代はそういう教育現場のあり方、逆に言うと、教師とはどういう存在であるべきなのか、何が求められているのかといったことが、根本的に問い直されているといった中で、我々は、そこにしっかり目を向けていかなければいけない、そんな問題が浮かび上がってきた気がします。

そういった問題意識を皆さんと共有しながら、しっかりとこれからも、この難局でありますけれど、心を一つにしながら、乗り越えていきたいと思えます。本日はありがとうございました。

佐藤政策部長：次回の会議は来年度を予定しております。具体的な日程等につきましては調整をさせていただきます。以上をもちまして、令和2年度第1回神奈川県総合教育会議を閉会いたします。長時間にわたりましてありがとうございました。

---

会議資料 「新型コロナウイルス感染症の影響による県立学校の現状」